

平成二十六年五月二十六日（月）薄曇

最近全国の図書館、博物館にて、保存資料の收容能力不足顕在化し、折角貴重資料の寄贈も有難迷惑と云々。一方、寄贈する側は祖先傳來の資料に加へ、自分一代に蒐集せるものを何とか後代に貽さむと思ふも、子孫に最早保存の能力なきを見越し、地元の図書館、博物館への寄贈を試みるなり。しかしその殆どは謝絶に會ひ、己むなく放棄處分となる。

我が國は古來財物の保管に優れ、漢籍など既に漢土にては散佚せるものをも多く含む。此を以て識者図書館、博物館の收容能力擴充を提言す。勿論これ一定の効果期待し得べくも、果して抜本的對策なりや甚だ疑問なり。

抑も図書館、博物館、動物園など西歐の發想にして、展示、貸出を通して地元住民の知識擴充を目的とす。されば個人は特に書物を自家に所有せず、安價に借出して教養を積むを可能とせり。明治初期訪歐の先人この方式を初めて目にし、その導入を實現す。然れども我が國にては寧ろ書物を書寫しこれを再三讀込むを主とし、かくて自家に藏書するの習生れ、室町期大藏經の輸入、對漢土朝鮮の貿易の大科目となる。

西歐にても無論學者、富豪に汗牛充棟の家多しと雖も、大概は書籍、資料の蒐集保管は圖書館など公共機關の業務にして、個人は専らこれを利用して、我が國にては正倉院御物の例あるも、書籍、資料の蒐集保管は寧ろ各個人これを行ひ來りけり。これを文化的に見るに、畢竟民族の文化並びにその遺産は、その文化を擔ふ各人が保存傳承に一役買ふを基礎とすべきを思はば、日本流にも亦價値ありと言ふべし。されば古事記、日本書紀、更には源氏物語など原本は既に失するも、各地に存する寫本の數々照し合せて復元するを得。地方の舊家より歴史的重要な古文書發見せらる、例も亦多し。先の大戦中空襲により我が家の藏書すべて灰燼に歸す。其の中に芥川龍之介全集あり。後日某農家闇米一俵と交換に該全集を求むるありけりとぞ聞く。米を惜しむ一方、戦中なほ、讀書を忘れぬ農家のこと印象に残りたり。

戦後我が國の住環境激變し、地價安きが故に面積に餘裕ある地方住宅より人去りて、地價高き都會の狭き住宅に人滿ちて、藏書の習次第に廢れむとす。特に一子相續廢止せられ、同胞連合して父祖の家宅相續となれば、賣却は不可避且つ更地化亦必須にして、故人愛藏の品々も悉く廢卻の餘儀なし。既にこの事豫見し生前身邊整理とて、大量の書籍、日記、寫眞に至るまで處分す。一切空とは言へど、長き人類連鎖の一環たるの自覺をも失ふに至らむ。而も彼の地にはこれを保存せむとする圖書館あるも我にはなし。かくてグローバル化の波激化する中、我が國の西歐化得る所寡く、失ふもののみ多かるを放置せば、外來文化の吸収により成長し來れる我が文化、將にその成長要因によりて衰ふを懼る。